

エパフロデト―魅力的な人

(ピリビ二・二五―二九)

「最近の若者は利己的だ」で物議を醸した若手政治家が党を去った。金銭問題が原因と聞く。だがもつと驚いたのはそれを聞いた首相が漏らした「仕方がない」の一言。いわゆる「三バン」の無い議員という彼の経歴のせいもあるかと思うが、妙に「あつさり」していることが非常に気になったのだ。いつも内輪でかばい合いも困るのだが、問題が起きたら「ハイそれまでよ」とバツサリではどうにも寂しい。そこへ行くと我々がパウロ先生は大違いだ。ピリビから遣わされたエパフロデトが病に倒れ、帰郷を余儀なくされるという状況下での使徒はエパフロデトを「切る」どころか、最大級の称賛と共に送り返す。なかなかの人物である。以下パウロの語るエパフロデトの姿から魅力的なキリスト者について三つのことを学びたい。

一、強い責任感を持つ人

二五節においてパウロはエパフロデトを自らの「兄弟」「同労者」「戦友」と

呼んでいるが、後の二つは「奉仕」との強い関連が指摘される言葉である。しかも原語ではこの二つは「共に」という接頭辞で始まることばだ。つまりエパフロデトはパウロと共に働き、共に戦った存在だった。だが二六節を見ると彼の任務は重病のゆえに完遂出来なかつたようである。そして彼はそれを気に病んだ。ある学者はここでエパフロデトの悩みはある種のホームシックではないかと仮定するがこれは根拠に乏しい。むしろ彼の悩みは奉仕に対する責任感に起因している。「出来ない自分」「期待に応えられない自分」に悩んでいたと考えるのが自然だ。いい加減な人間にはこうした「悩み」はない。だから彼の思い煩いはある意味で彼の内にある「正しい責任感」の存在を示していると言える。

二、交わりと奉仕が統合されている人

再び二五節に着目すると、その最初にあるのは「兄弟」である。これはキリストにあつて結ばれた「兄弟」の愛の絆を指し、キリスト者の全ての交わりの根幹である。だがパウロとエパフロデトの関係は同時に共に働き、闘うという「奉仕」によつて結ばれた絆でもある。この両者が統合されていることにエパフロデトの魅力がある。現代教会では「個人の救い」が力説されるあまり、信仰が内向きになっていきがちだ

と指摘されているがこれはもつともな批判である。救いとは畢竟救われたで終わるものではなく、奉仕という形でその地平を広げて行くものだ。実際イエスも「天におられるわたしの父のみこころを行なう者」はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです（マタイ一・二・五〇）と言つておられる。エパフロデトは交わりだけで働かないものでも、働きによつて自己義を立てようとするものでもなかつた。救われた喜びと感謝をもつて、主に仕えるという絶妙のバランスに生きた男だったのである。

三、主に徹底して献身している人

パウロが称賛するエパフロデトの魅力、その第三のものは彼のキリストに対する徹底的な献身である。それは三〇節の「キリストの仕事のために、いのちの危険を冒して」に明らかである。「ローマの平和」のもと道路網が整備されていたとはいえず、時は二〇〇年前のことだ。ピリビからパウロの牢獄までは、近いエペソと仮定しても直線で三百キロ、ローマとなれば一千キロをゆうに超える。それだけとつても十分に大変だ。だがエパフロデトはそのリスクを恐れず、ピリビ教会の期待を背負つて旅立った。ちなみにこの「いのちの危険を冒して」と訳される言葉はギャンブルの世界でも用いられていたという。その比喩で

考えるとエパフロデトは彼の人生をキリストに「一点張つた」と言える。しかし結果は病でリタイヤという「残念」なものだった。だがパウロは目先の「結果」を見るのではなく、キリストの為に献身した彼の「生」を見、掛け値なく称賛したのだ。

* * *

長く無牧であつたシンガポール日本語教会に彼が着任したのは一九九九年のことだった。前職は大学生伝道団体の主事。五〇を過ぎての海外生活、娘さんを連れて家族での移動。リスクを取つた選択だった。専従の牧師による牧会を兄弟姉妹は喜び、教会は勢いづいた。だが新世紀を過ぎて程なく彼は倒れた。膵臓癌。消化器最後のガンだ。激しい闘病だったが彼はついに説教壇を譲ることはなかつた。召される二か月前。「具合が悪くなつたらストップですよ」と役員さんと一緒に念を押したが無駄だった。しかしふらつきながら説教をし続ける彼に私たちは圧倒された。そしてその春、彼は旅立った。故片岡伸光牧師である。「効果」から考えれば彼の賭けは残念だったのかもしれない。だがそれは主にある考え方では断じてない。キリストに賭けた彼の生は永遠だ。主のゆえにリスクを取る、それがキリスト者の輝きである。